

認知症外来受診に消極的な家族との関わりを通して

医療法人財団 はまゆう会新王子病院

○安部千草 矢野奈津子 桑原直美 大谷麻岐 渡辺千代子
箆島明彦 西島博満 瀬川賀世子 宮崎三枝子 惣明靖元

【はじめに】

現在、透析患者の約 10%が認知症を合併していると報告がある。当院でも、日々の透析看護からは、何らかの介入を必要とする患者は多く、家族との情報共有は不可欠である。今回、認知症外来受診に消極的な家族と関わった症例を報告する。

【症例】

A 氏 80 代 女性 導入前、認知症診断なし。導入後、同居の家族より認知力低下の報告あり、認知症外来受診。認知症を診断されるが、家族の意向で内服治療は行わず経過観察。その後、認知力の低下がみられ、介護困難で施設入所。次第に施設スタッフを対象とした周辺症状が出現し、認知症外来再診を促すが、本人が受診を拒否、抑肝散を処方し経過をみた。更に周辺症状が悪化し、施設・家族と話し合い、再診の運びとなり内服治療開始後は、トラブルは減少した。

【考察】

高齢化が進み、認知力が低下・独居や施設入所患者などが増加し、家族へ連絡しても患者状況の理解が不十分・連絡が容易につかないなどの問題がある。

認知症看護についての学びを深め、多職種協働による情報収集・対策の共有を強化しケアの向上、集団治療の場である透析室で、認知症のある患者に対しても安全な医療の提供が行えるよう取り組んでいきたい。